

← 真鍋の高台に燦然と聳え立つ校舎（現在の旧本館）（明治40年頃）。この地に移転すると、端艇を購入して水上運動会も開始（『むかしの写真土浦』より転載）

平成24年7月10日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



← 明治7（1874）年に、日本で最初の運動会が行われた東京・築地の海軍兵学寮（海軍兵学校の前身）址。「競闘遊戯会」と称したものであった

大きな行事として今も受け継がれている「一高祭」や「一高オリンピック」。その原点は草創期の土浦中学校「運動会」にまで遡る。運動会は、生徒同士の親睦・心身鍛錬を図るばかりでなく、地域の人々も観覧する一大祭典であった。そもそも日本で最初の運動会は、東京の海軍兵学寮で実施された「競闘遊戯会」といわれる。その後、運動会は文部省令で薦められ、全国の学校に広まる。今号は、明治期の本校の特別活動について、「運動会」を中心に記してみたい。

日本独特の行事「運動会」の発祥

運動会の淵源を求めると、明治7（1874）年に、東京・築地の海軍兵学寮（海軍兵学校の前身）で、英国人の指導で催された「競闘遊戯会」であるといわれる。また「運動会」の言葉が最初に使われたのは、明治16（1883）年における東京大学の「第1回競技運動会」であった。そして明治29（1896）年の文部省令で薦められると、全国の小中学校で運動会が実施されるようになり、地域社会の中心行事としての性格も持ち始める。

種目内容は、当初は競技会的な色合いが濃かったが、次第に、参観者の心を掴むべく、娯乐的レクリエーション的な色彩が強められていく。その結果として、より面白く、より興味を引く珍妙さを打ち出したり、世相を敏感に反映させたりする内容や演目が、拍手喝采を博すとともに、運動会の評判を高めていった。

「運動会」の利益金で校旗を作成

現在とは違った、こうした世情で世間の注目を集めつつ、土浦中学校の運動会は毎年開催。当時の人々にとっては、大きな楽しみの一つであり、地域の一大イベントであるため、そこには、町内はもとより近在からも多数の観客が訪れた。

明治36（1903）年秋の運動会は、4年生が中心となって開かれたが、売店の売り上げ利益が何と50円という大金に達した。そこで生徒達は校旗を寄付しようとした。年末に、優雅で気品と重厚感に満ちた立派な校旗が出来上がると、一時校長宅に保管し、明治37（1904）年1月1日、校旗捧呈（贈呈）式を執り行った。皇居遙拝式後、4年生は武装（軍事教練）

スタイルに身を固めて校長宅に赴き、校旗を受領。校旗を先頭に土浦町内を行進。立田校舎に至り、11時より全校生徒整列のもと、生徒代表の手から福山校長へ校旗が手渡された。寄贈された校旗は今も旧本館資料室で輝いている。



明治36（1903）年の運動会では、売り上げ利益50円（現在の約200万相当）。この大金で作成され、学校に寄贈された校旗。現在は旧本館資料室に展示される

真鍋台校舎に移ると水上運動会も

真鍋台に新校舎が完成。そのため明治38（1905）年3月5日に移転式を挙行し、学年末試験は新校舎で行われた。そして5月20・21日には「新築落成記念陸上大運動会」が催された。野球、撃剣、庭球、陸上競技、仮装など、従来通りの内容だったが、この時は、「記念絵はがき」も販売された。その一方で、売店係が本職のラムネ屋に販売を認めてしまうなど、生徒のやる気のなさが心なしか垣間見えて、いま一つ盛り上がりには欠けていたようだ。要因としては、生徒達の中に、慣れ親しんだ立田校舎が「海老茶式部（えびちやしきぶ）。紫は当時華族が用いる高貴な色で、そのままでは畏れ多いので、それに代わり海老茶色の女はかまが、女学生のスタイルとして定着していた。そこで女学生を紫式部にあやかり「海老茶式部」と呼んでいた）の襲う所となり」で、真鍋台の僻地に追いやられたとの悔しさが、相当に募っていたから、と考えられなくもない。

その後、真鍋台校舎の素晴らしさを実感した生徒達は、海老茶式部への怨みも消え、真鍋台の青春を謳歌し、陸上運動会に加えて水上運動会（端艇競漕会）も開始し、土浦中学校の名物行事に大成させていくのだ。

秋の運動会「ヒョットコ事件」

しかしその直前には、生徒達の盛り上がり冷や水をあびせる事件がおきた。明治39（1906）年10月6日、秋季陸上大運動会での「ヒョットコ事件」（小紙3号で詳述）だ。3年生が思案をめぐらし、満を持して登場させた余興の山車は「車上、酒樽を積堆、その上に某生徒の大江山酒呑童子。拍手喝采四方に起こり、実には我々をして、これ同じ学びの庭に通える生徒の仕業とはとても思えぬ」と大絶賛大人気。それゆえ、山車を返却する際も真鍋・土浦両町内で演技し、人々の喝采を浴びた。しかしこれが「されどこの巧妙なる余興が遂に社会の悪評を蒙り、且は教育界の大問題とまでならん」とは図らざる事なりけり」と、予想外の展開を招いてしまう。「野蛮で下品」「猥褻行為」「無届けデモ」等々、各方面から糾弾され、関係者の責任を問う声があがってきた。そのため10月29日、遣澤恒猪校長が依願免職し、秋田県立大館中学校長に転じ、3年担任の先生方も県外の学校に異



霧ヶ浦で端艇を漕ぐ。制帽・シャツ姿で乗艇の生徒

動する局勢となった。12月1日の送別会で、遣澤校長が「従来の事態より今回の事に至る真情を指示し、而も一毫の私情に及ぶなく、唯今回の辞任を以て将来一新の機を開き、以て全般の風規を振刷するを得ば、余の一身、万事を犠牲とするも余の満足する所なり」と一身に責めを負う覚悟を示すと、場内は「満場聳然（まんじょうしょうぜん。慎み恐れるさま）、寂として水を打ちたる如く、唯暗涙に沈めるの状あり」といった様相で、生徒達の落胆ぶりがうかがえる。12月2日、生徒職員全員が見送る中、遣澤校長は土浦駅を出立し大館に向かった。

校風刷新の嚆矢となる雪中行軍

同年11月27日、幸津國太郎校長が太田中学校長から土浦中学校長兼教諭に任じられ、12月20日に着任した。幸津校長は「学校の主役は生徒、生徒が変われば学校が変わる」との信念を心根に据え、早速、校風刷新・面目一新に向けて始動する。意気消沈した生徒達の志気を高めようと、機をうかがい策を練った。明けて明治40（1907）年2月7日、夜来の大雪。これこそ千載一遇のチャンスととらえた校長は、授業を急遽取りやめ、全校臨時雪中行軍を敢行すると指示。これに対し、生徒の歓声が各教室で湧きあがり、意気軒昂、すでに万里の外にまで駆け出しそうな勢いが漲る。水戸街道を北進し、中貫から稲吉村に至り、各学年入り乱れて大雪合戦。帰路は中貫から6000m競走。個人・団体学年対抗が行われ、個人1位は2年乙組大川延男、団体1位は3年、と記録には残される。さらに幸津校長は「将来執るべき方針に付き予め生徒父兄に告知し置くこと

必要」を感じ、2月16日に父兄懇話会を開催。154名の参加者に学校の将来像と父兄心得を説く中で、特に、創立10周年記念事業として端艇（短艇・ボート）建造の計画を明示し、父兄の理解を求めた。霞ヶ浦という他校にはない自然環境を生かし、生徒の志気と団結を高め、ひいては学校の活性化を図るにはボートが最適という思いを強く訴えたのだ。端艇部は、すでに明治34（1901）年に創部されており、翌年7月には5人乗り端艇「筑波」「霞」、和船「西施」「亀城」を購入。その翌々年6月には川口水神宮前を決勝点に端艇競漕会が行われていた。

創立10周年記念端艇建造の雄図

154名の父兄を前に、熱く語った同日の明治40（1907）年2月16日に、国津校長は、石村・小松崎・小田原・小泉各教諭を「端艇建造調査委員」に任命した。そして一気呵成に計画を推し進める。3月上旬の委員会報告を受け、同月12日に職員会議、同月19日に進修會評議員会で建造を可決。4月5日には「土浦中学校創立満10周年記念端艇建造趣意書」を配布し、遠近の有志に発起人を依頼。同月13日には第1回端艇建造発起人会を中城会議所で開催。この時は、賛否両論が噴出したが、校長はじめ先生方の熱誠と意気込みが伝わり、同月16日の第2回端艇建造発起人会では賛同を得て、事業計画が決定。寄付金は土浦・真鍋を中心に広く募ることになった。これに呼応し、校内では同月18日、平川・此田・石村・小松崎・小田原・高野・小泉・中山の各教諭を「端艇寄附募集委員」に任命した。委員を中心に東奔西走し、一般寄付金2100余円（575口）、

職員寄付金360余円、合計2500円近くの寄付金を調達した。この浄財をもって、端艇3隻新造（価格1050円、運搬費を含む、「筑波」「霞」「桜」と命名）、中古艇2隻購入（価格250円、「鹿島」「香取」と命名、練習艇とする）、さらに艇庫を価格600円で新設することとした（埋立、地ならし等一切の費用を含む）。艇庫の場所は、当初、川口川右岸が適地とされたが、土地埋立工事が非常に困難と判断され、川口水神宮手前の地（現ホテル観光付近）に変更した。塚越斧太郎氏の請負で艇庫建設はすぐに開始された。

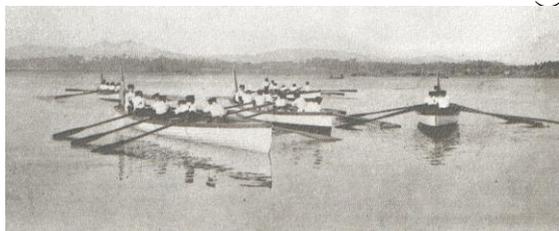


あまの宮の中（左）真
に神居の（右）写
川口の大正鳥湖（の
市の上宮とたしり
浦現在（上）か
土神の上にあむか
る水陸に『むかし』より

端艇については、10月4日には中古艇「香取」が到着したが、「鹿島」は未着。調査してみると破損を蒙り、佐原にあることが判明。尾崎楠馬（在職明治40年4月）同44年7月、本校校歌作曲者）・小田原勇（在職明治39年11月）同41年1月）両教諭（小紙22号で詳述）を直ちに派遣。すると破損は軽微とわかり、修繕の上、同月15日に川口に回航された。他方で新造艇は、霞ヶ浦の増水により艇庫建設が遅滞したままであるため、建造を請け負った東京浅草の野口庄吉氏に保管を依頼するよりなかった。

端艇の活用にあたっては、10月5日に五年生経験者を艇長に任命した。また尾崎教諭が漕法を教え、日々漕手を育成する一方で、小田原教諭が水上部長として、一切をマネジメントした。後年、このコンビは静岡県立見付中（現静岡県立磐田南高）に赴任し、創設期の学校づくりに多大な功績をあげられたのである。また「水上部端艇取扱ひ規則」も制定され、10月31日には、端艇建造委員会で「創立10周年記念式と端艇進水式」を12月1日に実施すると決した。創立記念日を4月22日とすることは、4月時点で確認されていて、端艇新造・艇庫完成を待つて式典を確定したのだ。

12月1日は「一天払うが如く晴日暖和、いさかも寒さを覚えず」という好天氣に恵まれ、10時より学校講堂で記念式典。12時30分から「海国男子」（真鍋町有志の寄付）の額が掲げられた川口艇庫前で進水式。5隻のボートが「萬衆歡呼喝采の間に勇ましく進水」。続いて新艇「筑波」「霞」「桜」による競漕レースが五回行われた。これこそが水上運動会の幕開けであった。（次号に続く）



水上運動会の幕開けとなる5隻の端艇。左遠方に筑波山（『むかしの写真土浦』より転載）

追記「旧本館」またもテレビ放映 B500テレビ「知られざる百年遺産わが町の建築物語」（火曜20:54）で7/24（火）予定。